

第3章 : 初期研修 ～ 黒田の見つけた課題 ～

●黒田

電車を降りて、大きく息を吸った。

雲ひとつない青空と、まだしばらく散りそうもない桜の花。

「まるでオレの門出を祝っているようだな」

4月1日。オレの社会人デビュー日だ。

初出勤ではさすがに遅刻は出来ないから家は少し早めに出た。会社はもう近くだけど、入社式まであと30分ほどある。会社の方向にゆっくりと歩くと、同じ方向に歩く人は皆先輩社員ではないかと思えた。

しばらく歩くと、オレを抜いていく集団の中に見覚えのある女性がいるのに気がついた。

「おはようさん！」

「あ、おはようございます」

「いよいよだね」

同期入社 of 明智だった。同期のオレにも敬語を使ってきて、かなり緊張しているのがうかがえる。明智の姿を見ると気持ちに余裕が持てた。

とはいえ、織田リフォームが入っているビルを前にすると、さすがに気が引き締まる。

「今日からここで働くんだ…」

一度、背筋をピッと伸ばしてから、エントランスに入った。

エレベーターを降り入社式の会場である大会議室に向かうと、若い先輩社員が会場に誘導してくれた。

「あの人優しそうだなあ、ね！」

「あ、はい」

会場に入ると、既に同期の4人が座っていた。

皆とは、内定者研修で1度だけ顔を合わせている。

オレと明智を入れて今年の新入社員は総勢 6 人だ。そのうち 5 名は男性、女性は明智 1 人だった。

皆に軽く会釈をして椅子に座る。静かな入社式会場の中、いるのは新人 6 人だけ。皆、緊張しているのか、何も話そうとしない。そこに座っていると、オレも徐々に緊張が高まってきた。

入社式 5 分前になると、先輩社員が続々と会場に入ってきた。

あの人は優しそう、あの人はちょっと冷たそうだ、と 1 人で値踏みをする。

そして、最後に入ってきたのは織田社長だ。最終面接で一度顔を合わせたけど、やはり今日も威圧感がスゴイ。

入社式が進み、社長からの挨拶。

「みなさん、入社してくれて本当にありがとう。

数ある企業の中から私たちの会社を選んでくれたことを嬉しく思います」

社長の話し方は穏やかで、見た目の印象とは違った。

「明智さん、君はじっくりと一つのことに取り組むのが得意のようだね。織田リフォームでも期待しているよ。加藤くん、君は…」

と社長は一人ひとりにメッセージをくれる。全く予想外のことで驚いた。入社式って「入社おめでとう、頑張って早く一人前になってください」とか形式的に言われるとばかり思っていた。

「黒田くん、君は…」

自分の名前が呼ばれると、ビクッと身体が反応した。

=====

●木下

入社式は無事に終わった。いよいよ研修がスタートする。

講師という立場は人生初だ。

相手が新入社員だと言ってもやはり緊張する。

「緊張しないでね」と言うボクが一番緊張していると思う。

6人の新人のうち5人は緊張しているようだったが、1人だけはニヤニヤしてボクを見ている。

なんだかボクの緊張が見透かされているみたいで気持ちが悪い。

「大丈夫だ、1週間みっちり練習したんだから」と自分に言い聞かして、1つ目の講義を開始した。

1つ目の講義は「会社の想い」。口は一生懸命に動かして話すけど、頭では「大丈夫か」と心配しているボクがいる。口と頭が別々に動いている感じがした。足も地面についていない感じだった。社長から聞いた創業の想いをたっぷり1時間話したつもりだったが、終わってみると予定より20分も早かった。だいぶ早口になってしまったようだ。講義をしたというより、メモを読んだという方が正しい表現かもしれない。

1つの講義が終わっただけなのに、すでにワイシャツの中は汗でびしょりだった。

新入社員はメモをとりながら聞いてくれるけど、ずっと表情は変わらず堅いままで、分かっているのか分かっていないのかも分かりにくかった。

2つ目の講義を終えると一旦昼休みの休憩に入る。

午後はアッシュの平川さんの研修になるので、一旦休憩できる。

長かった午前中を終え、ボクはふう〜っと大きく息をついた。

午後、平川さんの初めの講義は「社会人としての心がまえ」だった。

皆の表情は明るく楽しそうに見える。ボクの時とは違う気がする。メモしている量も、心なしかボクの時よりも多い気がした。当たり前なのかもしれないけど、ほっとしたのと同様に悔しさも感じた。

平川さんの研修は面白い。

面白いといってもゲラゲラ笑うような面白さではない、大切なことを興味持って考えて取り組めるような仕掛けがたっぷりと入っている。知識を詰め込んでいくのではなく、ス〜っと頭の中に入ってくる感じだ。

「あなたの感動エピソードを教えてください」というケーススタディでは、意外な視点で

の解説にボク自身が反省することになった。また「今度の誕生日、どのように過ごしますか？」のケーススタディの解説も今までのボクには無い視点だった。新入社員用の研修なのに、ボク自身ができていないことばかり。教える前にボクが成長しなきゃと焦りを感じた。

メモをとっている量は、きっとボクが一番多いだろう。

=====

●黒田

5日間の研修の最後は決意表明だった。

この5日間は、9時～18時の研修の後に日報提出。帰宅後も課題があり、夜中までかかることもあった。休む時間のないあつという間の5日間だった。体は相当疲れていたけど、「会社で仕事をしている」という感覚に何だか大人になった気がしていた。

決意表明式の会場には、ほぼ全社員が顔を揃えていた。

社長や役員もいる。どうしても外せないアポイントのあるメンバー以外は全員集まったようだ。

この5日間の研修の中で一番効いたのは自己内観研修だ。自分の内面を深く掘り下げて課題を見つけて行く。この研修の中でオレの課題は「お山の大将で満足している小心者」と分かった。

一人前の社会人になって行くには、この課題を克服していかなければならない。

前の明智の決意表明が終わると、オレは壇上に上がった。

室内を見渡すと、全員の視線がオレの口に集まっているのが分かった。

オレの心臓はこれまでにないほど大きく鼓動していた。

オレは昨晚遅くまでかけて書きあげた決意表明文に目を移し、ひと言ずつ、ゆっくりと読み上げた。

「決意表明。私、黒田貴之は…」

織田社長は目を大きく開いて、うんうんと大きくうなずきながら聞いてくれた。宣言し終わると一番大きな音で拍手をしてくれた。

5日間、身体も使ったし頭もいっぱい使った。でも、一番多く使ったのは心のような気がする。まだ入社してたったの5日間だけど、何かを成し遂げたような達成感を感じていた。

=====

●木下

何とか5日間の研修が終わった。

皆いい決意表明ができたと思う。ひと仕事やり終えた達成感があった。

決意表明式を見に来てくれた平川さんにもお礼を言うと、「木下さん、5日間頑張りましたね。初日と比べると格段によくなりましたよ」とほめてくれた。まだまだ未熟だということは分かっていたけど、その言葉を聞くと、目の奥からじわっと涙が出てきた。

「でも」平川さんはひと呼吸おいて、釘をさすように言った。

「ここまでは予定通りと言ったところですよ。大切なのはこれからですよ」

「はい、分かっています」

「きっと、大変なことも出てくると思います。その時は遠慮しないで相談してくださいね」

最後に平川さんはもう一度あの言葉を言った。「ホットウィラーと一緒に仕事をすると楽しいですよ」と。ホットウィラーが何なのかは聞きそびれたけど、胸はぼわ~っと熱くなっていた。

その時、ボクはそんなに彼ら新入社員のことを心配していなかった。

でも、平川さんの言葉が本当に重いものだと気づくまでに、そう時間はかからなかった。